



一橋大学大学院博士課程
森 脇 孝 広

内灘闘争と出稼ぎ漁業の変容

はじめに

「金は一年、土地は万年」。こんなムシロ旗をかかげてたたかわれた内灘闘争から50年がたつ。日本中の視線を一身に集めたかつての北陸の小さな漁村も、いまではたくさんの家が立ち並び、金沢のベッドタウンへと変貌を遂げている。この内灘闘争に関しては、すでに資料集・証言集が刊行され、シンポジウムが開かれるなどして、「闘争の記憶」を後世に伝えることができる程度実践されている。それらの取り組みは、「戦争のできる国づくり」が進められつつある現在の日本において重要な意味を持つものであることを私は疑うものではない。しかしその「闘争の記憶」が、様々にある「内灘の記憶」と結びついて理解されるならば、より深みと広がりをもつ記憶として多くの人々に共有される可能性が開けるであろう。この稿では、そのなかから出稼ぎ漁業を取り上げ、その始まりから闘争後の変容までを不十分ながら述べてみたい。ここで出稼ぎ漁業を取り上げるのは、それが「内灘の記憶」を構成する重要な要素と考えるからである。

1 出稼ぎ漁業の始まり

中山又次郎『内灘郷土史』（内灘町、1963年）によると、出稼ぎ漁業の始まりは19世紀末にさかのぼる。漁獲を求め、近隣の松任や美川へ進出したのを皮切りに、福井県方面へも足をのばすようになった。そんな内灘漁民のなかから、北海道へ渡るもの

があらわれた。「島元四郎右衛門父子」が「明治二十年留萌^{るもい}に至り捕鯨業に就いた。その辺はニシン漁が有望であるのを認めて羽幌^{はぼろ}で翌年からニシン漁を始めた」という記述が『内灘郷土史』にみられる。留萌・羽幌は北海道北部の日本海に面する漁村である。こうして1880年代半ばには、内灘村の生命線となる北海道出稼ぎが始まったのである。季節は4～6月、毎年400～500人の漁民が羽幌を中心としてニシン漁に従事した。ニシンといえば、現在では資源の減少でお目にかかることは少なくなりましたが、戦前まではイワシとならんで漁獲はもっとも多く、日本の沿岸漁業を支えた代表的存在であった。内灘の漁民は、刺網とよばれる漁法で1日に7～8回も網の上げ下ろしをして現地の漁場開発に貢献した。

北海道への出稼ぎは、1900年代初頭に始まったホタテ漁により、さらに飛躍、発展した。オホーツク海沿岸北部の猿払村沖合^{さるふつ}にホタテが生息することを知った漁民が入漁するようになったのである。漁期は7～9月、6月にニシン漁を終えたものの多くがこの地に渡ってきた。鉄製のつめのついた網を海底で曳きまわすという特殊な漁法は、大量の漁獲をもたらす代わりに、危険をともなった。網を船に揚げる際、つめが腹にささる、波浪で船が転覆するなどして命を落とすものが多かった。また昼夜を問わない作業はしだいに漁民の健康を蝕むようになり、栄養不足からかっつけにかかるものもいた。それでも「加賀衆は命より金が大事か」といわれるほどよく働き、地元の漁業の発展に大きく貢献した。そんな内灘漁民にひとつの危機がおとずれる。1934（昭和9）年、猿払村より入漁禁止が言い渡されたのである。ホタテ漁がすでに出稼ぎ漁業の重要な一角をしめていた内灘漁民にとって、この通知は生活の拠り所を失うことを意味した。そこで村では「突然斯くの如く入漁禁止せられては恰も農家が耕作地を奪われたる如く今日より生活に窮迫を来し本村出稼漁民の困憊其

極に達せるなり」と、猿払村に入漁の継続を訴えたのである。結局この訴えは認められ、漁船数の制限つきで継続されたのであるが、内灘漁民の勤勉さを傍証するには十分であろう。

このほか、函館・松前方面でイカ釣り漁をおこなっていた漁民が、漁法の研究開発による漁獲の増大で現地の村長から表彰を受けたこともあった。また北海道以外では、山口県方面へイワシを獲りにいき、猿払と同様入漁を拒否されたこともあった。このように内灘の漁民は、魚を追い求めて日本列島を縦断し、その懸命な働きぶりで現地の漁業振興に重要な役割を果たした。

2 内灘闘争における漁業の問題

敗戦直後の日本漁業は、食糧不足解決のために増産を至上命題とする一方、「マッカーサー・ライン」の設定により操業区域が12海里以内に制限されるという厳しい条件のもと再出発した。その上海外からの引揚げにより沿岸漁村でも漁業就業者が増加した。こうしたことにより出稼ぎに収入の多くを依存していた内灘漁民は困難に直面した。それは、山口県豊浦で地元漁民が内灘漁民の入漁反対を求めて運動を行ったことに端的に示されていた。この他、松前でのイカ釣り漁のように、他県入漁船の機械化・大型化に対抗できなくなる例もあった。加えてニシンやイワシの回遊量の減少もあり、総じて1950年代初頭という時期は、出稼ぎを行う内灘漁民にとって先行きの厳しいものとなった。1952年9月に始まる試射場用地の接收問題は、このような状況のもとに飛び込んできた。

1年近くにおよぶ反対闘争を支えた理由に風紀の問題があったことは、多くの証言が明らかにするところである。出稼ぎで1年のほとんどは青壮年男性のいない村、そんな事情を反映してか、反対の輪は女性を中心に強固なものとなっていった。もうひとつには「浜は自分たちのもの」という意識があった。

地引網でとれた魚を金沢方面へ売りに行くといった収入の面、あるいは海水浴など憩いの場として慣れ親しんだという心情的な面がこうした意識の根底にあった。

しかしその一方、村政担当者は、接收受け入れを視野に入れた動きをかなり早い段階から見せていた。当時村長を務めていた中山又次郎が後年編んだ『内灘郷土史』には、その経過が詳細に記されている。52年9月末、すなわち接收話が持ち上がってすぐの頃と思われるが、各部落から集めた要望として、他府県への入漁斡旋、漁船改造の費用のことが記されている。おそらくは部落の有力者との会談のなかでできたものと思われるが、出稼ぎの行き詰まりや漁船機械化への対応を連想させるこれらの要求は、闘争のごく初期の段階から意識されていたと考えられる。

こうした要求は、闘争が大詰めを迎えた53年9月、接收受け入れと引き換えに政府に対してだした条件のなかにもみられる。接收される海面に対してなされる漁業補償以外に、他府県への入漁斡旋、北洋漁業権の特別免許がこれにあたる。また漁業からの転業資金1億円の融資も盛り込まれた。

多くの村民の反対や外部団体の応援にもかかわらず、9月半ば、村当局は政府と接收受け入れの調印を交わした。漁業問題から内灘闘争をみると文字通りの条件闘争ではあったが、それは出稼ぎ漁業が存続の危機に立たされるなか、生き残りをかけての模索でもあった。そしてその姿は、「沿岸から沖合へ、沖合から遠洋へ」をスローガンに漁場の外延的拡大の道を取り始めた当時の日本の漁業政策のなかでもがき苦しむ、沿岸漁村が抱え込まされた矛盾そのものであった。

むすびにかえて—闘争後の漁業と漁民

闘争後の内灘漁民のあるものは出稼ぎを継続したが、ニシン・イワシにくわえホタテも資源の枯渇が著しくなったことから、60年代に終わりを迎える。

漁場の拡大とそれに伴う漁船の大型化・漁法の能率化の流れには勝つことができなかったようである。漁業から手を引いたもののうち船主だったものは漁船を売却した金で燃糸業に転業する、漁夫だったものは金沢方面へ日雇いに出るなどしてそれぞれに新たな人生をスタートさせた。しかしそのなかにおいて、出稼ぎ先に移住して漁業を継続したものがいる

ことは記されてもよいであろう。羽幌で水産加工場を経営するもの、猿払でサケ漁の新たな漁法を発明したり、養殖場を始めたり、ホタテ資源の回復に取り組んだものなど様々である。出稼ぎ時代に培った勤勉さ、研究熱心さ、粘り強さなどは、出稼ぎが終焉してからも内灘から遠く離れた地で根を下ろし、今も各地の漁業に貢献している。



社会福祉法人やすらぎ福祉会
昉 昭 三

内灘の変貌—内灘米軍試射場接收と河北潟の消失

「内灘」の変貌

東は漣を湛えた湖面とその潟淵の舟小屋とヨシキリなどの水鳥たちを育てていた葦を茂らせた河北潟に接し、遠くに秀麗白山を望み、西には松林とアカシヤ林に囲まれ白砂の風紋を造りだす砂丘とそれに続く渺渺たる日本海に続く集落、それが内灘の原風景であった。

しかしここ50年来、内灘は大きく変貌した。浅野川の堤防から内灘砂丘を遠望すると、立ち並ぶマンションと新築された住宅群が砂丘を埋め尽くし、遠くに白亜の10階建ての金沢医科大学とレインボーブリッジの二脚のアーチが続いている。そしてその住宅群の手前には雑草が繁った原っぱが続き、そこにはかつての河北潟と内灘の面影はない。

このような内灘の変貌の原因は、6つの集落を貫いて作られた湖岸の道路と砂丘を縦断して走る農業用道路の整備、金沢市のベッドタウンとしての砂丘

の住宅化とそれに伴う道路と人口の急増（2000年人口、9,125世帯、26,560人）、そして埋立てによる河北潟の消失等がそれなのである。

このような内灘の変貌は、戦後の日本の高度経済成長政策による日本全土の変貌と機を一にした面も強いものであろう。しかし内灘の歴史を紐解くと、河北潟の消失は必ずしも日本の高度経済成長政策だけではなく、むしろ直接的には1952年に起きた米軍の内灘試射場接收問題と強く関連しており、今日の変貌とそれは大きな関わりをもっているのである。

「河北潟を干拓したが大変な失敗やった」

内灘接收反対闘争50周年を記念する行事の一つとして、当時の運動に直接関係した内灘の方々の座談会が何回か開催された。その座談会の一つに、当時の「接收賛成派」と「接收反対派」のそれぞれの壮年幹部として立ち回ったA,B両氏の対談がある。この対談で司会者の最後の質問は「接收反対闘争を子供たちに伝えるとすると、どんなことを伝えますか？」であった。その回答はA氏：「接收の補償条件として河北潟を干拓したが、大変な失敗やったということを伝えたい。あの大切な自然を無くしたこと、潟の周辺の村々の沢山の人が潟での漁業—しじみ、鰻、鮎、あまさぎ、そめぐり漁等—で飯を食べていたのが出来なくなったことだ」